

科目名	児童家庭福祉特論	副題	
担当者	高柳 瑞穂		
開講期	前期	単位数	2単位
		配当年次	1・2年次
授業の概要	戦後の児童福祉法成立時と現在とでは、児童福祉に求められる機能や役割は大きく異なっている。また、同法における、18歳未満を「児童」とする定義は、歴史的に見ても制度上さまざまな問題をもたらしてきた。これらをふまえて、授業の前半では児童福祉に関する諸概念や児童福祉制度の歴史に関して基本的な事項を講義する。後半では本授業の内容並びに受講者の関心に即した文献を分担して読み、発表、討議を行う。授業全体を通して、受講者自ら児童福祉の諸問題について批判的考察を行う力、身に付けた知識を現代の児童福祉の諸問題に結び付けて論理的に考察する力を涵養する。なお、授業内容やスケジュール、学習課題は進度や受講者の状況等に応じて随時、変更もあり得るので、了承のうえ受講していただきたい。		
授業のねらい・到達目標	<ol style="list-style-type: none"> 1. 「家族」「子ども」「児童」等、児童家庭福祉に関する基本的な概念を整理し、理解する。 2. 上記の概念を社会福祉思想史・制度史の中に位置付けて理解する。 3. 児童家庭福祉に関わるさまざまな社会資源について理解する。 4. 児童家庭福祉に関する先行研究を読み解き、批判的に考察するとともに、現代的な問題に結びつけて考察する力を身につける。 5. 先行研究や他者の発表内容を批判的に読み解き、考察、討論する力を養う。 		
授業の方法・授業計画			
1	ガイダンス、授業の進め方		
2	日本の子どもの歴史1		
3	日本の子どもの歴史2		
4	欧米の子どもの歴史1		
5	欧米の子どもの歴史2		
6	公的扶助の歴史と子ども観——ディケンズ『オリバー・ツイスト』を題材に		
7	児童福祉六法の概要		
8	児童虐待の諸相		
9	障害のある子どもとその家族		
10	テキストに基づく発表、ディスカッション1		
11	テキストに基づく発表、ディスカッション2		
12	テキストに基づく発表、ディスカッション3		
13	テキストに基づく発表、ディスカッション4		
14	テキストに基づく発表、ディスカッション5		
15	まとめ		
期末			
授業に関する補足説明（課題に対するフィードバック、履修上のルール等）	講義と演習を適宜、組み合わせて行う。諸連絡は授業内ならびにでんでんばんを通じて行う。		
評価方法及び評価基準	授業内のディスカッション（30%）、発表（30%）、レポート（40%）		
事前・事後学習の内容	すべての研究は先行研究の分析から出発する。当科目ならびに自身の修論テーマに関する研究動向に常にアンテナを張り、普段から学術文献（英語文献含む）に触れる習慣を身に付けてほしい。そのために毎授業、事前に2時間程度、事後に2時間程度、読書時間を確保すること。		
履修上の注意	内容や受講者の興味・関心に即して演習（ゼミナール）形式の回があり、調査や文献収集・分析等、授業時間外での研究作業を必要とする。		
テキスト	授業内容や受講者の興味・関心に即してその都度、指定する。		
参考文献	吉田久一、岡田英己子（2000）『社会福祉思想史入門』勁草書房		